

平成31年第2回「子育てするなら山形県」推進協議会・概要

1. 日 時：平成31年3月22日（金）13時30分から15時30分まで

2. 場 所：山形県庁講堂

3. 出席委員：16名（五十音順）

國方敬司会長、井上恭子委員、井上達也委員、大風亨委員、岡崎恵子委員、岡村美由紀委員、片桐晃子委員、川又英子委員、木村博之委員、槌谷由美子委員、土谷理恵子委員、永盛善博委員、樋口愛子委員、藤原由美委員、松本邦彦委員、三浦明弓委員

4. 会議次第

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 開 | 会 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 | 子 | 育 | て | 推 | 進 | 部 | 長 | 挨 | 拶 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | 会 | 長 | 挨 | 拶 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4 | 協 | 議 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | (1) | 幼 | 保 | 連 | 携 | 型 | 認 | 定 | こ | ど | も | 園 | の | 設 | 置 | 認 | 可 | に | つ | い | て | | | | | | | | | | | |
| | (2) | 「 | や | ま | が | た | 子 | 育 | て | 応 | 援 | プ | ラ | ン | 」 | 平 | 成 | 3 | 1 | 年 | 度 | 関 | 連 | 施 | 策 | の | 概 | 要 | に | つ | い | て |
| | (3) | 「 | 次 | 期 | や | ま | が | た | 子 | 育 | て | 応 | 援 | プ | ラ | ン | 」 | の | 策 | 定 | に | つ | い | て | | | | | | | | |
| 5 | そ | の | 他 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6 | 閉 | 会 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

5. 会議録

■開会

■子育て推進部長挨拶、会長挨拶

■協議

(1) 幼保連携型認定こども園の設置認可について

- ・ 資料1により事務局（子育て推進部子育て支援課：高橋課長補佐）から説明。
- ・ 協議会として、全案件について、認可は適当であるとの意見で一致した。

(2) 「やまがた子育て応援プラン」平成31年度関連施策の概要について

(3) 「次期やまがた子育て応援プラン」の策定について

- ・ 資料2、3により事務局（子育て推進部：佐藤課長）から説明。その後各委員から意見を伺った。その後、各委員等の発言は以下のとおり。

【井上恭子委員】

- ・ これから必要になるのは子どもの力であり、保育の質が問われている中、子どもたちを育てる幼稚園、保育園、放課後児童クラブの先生方が果たす役目は非常に大きい。
- ・ 幼稚園、保育園の先生は、希望して先生になった人が多いが、なかなか続けることができない現状にある。先生が笑顔であれば、子どもたちも笑顔になるし、地域も明るくなる。

【井上達也委員】

- ・ 現在、少子化と言われているが、団塊の世代と比べると少子化だというだけで、豊かにな

ったことの裏返しだと思う。

- ・ いじめは、生産効率からいってもダメージが大きい。先生を増やし、学級数を増やすことができれば、先生方もきめ細かな対応ができ、いじめも減ると思う。
- ・ 祖父母世代の人の中には、高齢者のイベントに孫を連れて行ってはいけないと思っている人も多い。イベントに孫や障がいがある人も参加できるような環境づくりが大事だと思う。

【大風亭委員】

- ・ 企業も世代交代が進み、若い経営者が増え、育児に対しても理解がある人が増えてきている。
- ・ 働く人が減っているが、企業側からすると、若い人から辞めていくという印象がある。平成生まれの人が定着しない傾向がみられる。昭和生まれと平成生まれの間に大きな壁がある。
- ・ 平成生まれの人たちは、スマホで調べる傾向がある。次期プランの計画期間では、子育て支援や若者支援の対象として、そのような平成生まれの人たちを対象として、柔軟な考え方が必要。対象の人たちと同じ目線で、方向を見てプランを作成していく必要がある。

【岡崎恵子委員】

- ・ 今の父親、母親は、親になって初めて小さい子どもの面倒を見るため、おんぶしない、手をつながない、湯冷ましを薬局に買いに行く、サプリメントを食べさせる、スマホを見せるといった育児をしてしまう。そういう親に、しっかり子育てをしてもらうためには、保育園、幼稚園だけではできない。お年寄りを始め、地域でかかわっていく必要がある。
- ・ 以前は、「家庭科」の授業で「保育」という内容があり、保育園に中学生が子どもとのふれあい等を体験にすることがあったが、時間が取れないせいか、その機会も少なくなった。また、「職場体験」も日数が短くなった。今後は実施しないとも聞いているので、非常に残念である。
- ・ 子育て支援、ニーズだからと称して、何でもやってあげることが良いこととは思わない。親が親として育つような支援が必要と考える。
- ・ 保育者の質の向上、人材確保、一度、保育士として働いた人が長く働くことができる環境づくりを進めていく必要がある。

【岡村美由紀委員】

- ・ 子育てを応援してもらうのは、父親、母親であるが、助けてもらうだけでなく、自分自身も支え合う中に入ってもらおう。そのことが、子育てをしていく中で、大変だけれども、お互いに助け合ってやっていけるということを実感している。
- ・ そういった取組が、子どもの育成会での活動につながり、地域の公民館活動につながっていく。子ども育成会に携わっている、携わった人に対して、研修会をやることなどにより、地域を作っていく働きかけができるのではないかと思う。

【片桐晃子委員】

- ・ 平成31年度の子育て応援プラン関連事業を見ると子育て支援課や子ども家庭課だけでなく、義務教育課、若者・活躍男女共同参画課、雇用対策課、建築住宅課など、多くの課がかかわっており、総合的に子育て支援、少子化対策を進めていることがわかる。
- ・ また、関連計画を見ても、いろいろな計画が密接にかかわっており、次期プランにおいても、関係各課が連携して取り組む計画にして欲しい。
- ・ 内陸から庄内に嫁いできて、キャリアで悩んでいた人がいたが、先日の教員採用試験で見事に合格した女性がいる。夢を諦めない社会、夢に突き進んでいくことができる社会、子どもが何人いても女性が邁進できる社会、そこを県としてどのくらい応援してことができるのか、県としてがんばっていくことができるのか、1年後、今回見せていただいた31年度の事業を評価していきたい。

【川又英子委員】

- ・ ひとり親家庭応援センターには、県外からのメール相談が増えてきている。
- ・ 山形県に移住してきて、3月で丁度1年になる母子がいる。山形には四季があったり、長グツを履いての課外授業があったりと、好印象を持っていただいている。自分たちが気が付かない山形の良さを、県外から来た人たちに教えてもらっている。
- ・ 子どもの実態調査を行っていただいたが、子どもの貧困など、課題もあがっている。貧困対策として、次の支援はどうするのか。給付だけでなく、親に対する支援も考えて欲しい。
- ・ 養育費をもらっていない未婚の母が多い。養育費をきっちりもらうことができるような体制をつくる必要がある。

【木村博之委員】

- ・ 子どもを幼稚園、保育所に預けている立場からすると、幼児教育・保育の質の向上のためには、量も必要であるが、保育士、幼稚園教諭の不足は深刻な状況。
- ・ 学校の先生も状況は同じで、仙台市の学校教諭の募集では、「超過勤務ですが、やりがいがあります」とあった。
- ・ そういう中では、保育士、幼稚園教諭、学校の先生の質の向上は難しい上、確保についても、更なる支援が必要と考える。
- ・ 県の教育推進委員の会議の中で、教員の初任研と、10年研では、どういう風に教育をしたらいいのかという課題よりも、保護者対応が課題として挙がっている。教育委員会などが保護者対応などの面において、先生の負担軽減を行うことができれば、先生が子どもと向き合う時間が増えると思う。

【樋谷由美子委員】

- ・ 貧困、障がいのある子ども、病気のある子どもも考えたプランにして欲しい。
- ・ 他県では、保育所での医療的ケア児の受入モデル事業が始まっており、県でも新たにモデル事業を行っていくとのことだったので、期待して見ていきたい。
- ・ 子どものクラスに発達障がい児がいるが、先生も子どもも大変そう。発達障がい児に対する支援も必要と考える。

【土谷理恵子委員】

- ・ 目指す社会には、安心して、妊娠、出産ができ、楽しく子育てができる要素を取り入れて欲しい。
- ・ 現在進行形で子育てをしているが、楽しいという思いよりも、大変だという思いが強い。子育てが楽しいという視点を欠いて、子育てをしている。親の責任として、子どもが社会に迷惑をかけない、自分も職場に迷惑をかけないという思いが強く、子育てを楽しめていない。子育てをしていると、保育所、職場に謝ってばかり。
- ・ 私たち大人は、社会にお世話になって成長してきた。誰にも迷惑をかけずに子育てをすることはできないので、子育て中の人に対し、寛容な県になって欲しい。
- ・ 学校教育の中では、子どもたちに山形県民として、誇りを持って生きていこうという教育がよくなされていると思う。それが、家庭や地域の中でも、広がっていけばいいと思う。
- ・ 山形県は、共働き率、三世帯同居率が高いというが、数字が高い、日本一という面だけでとらえるのではなく、山形県民は働き者で、家族想いと解釈している。三世帯同居は家族想いでないとできないし、子育て中でも働くというのは、働き者でないとできない。自分は子どもたちに、山形県民は働き者で、家族想いということを伝えていく。家族想いで働き者の山形県の子育てを応援していく、そういったフレーズを、目指す社会に盛り込んでみてはどうかと思う。
- ・ 子育て応援プランの目標にもなっている男性の育児休業取得率の向上など、男性の育児参

画を積極的に進めて欲しい。自治体で父親向けの子育てのサイトを作っても、見るのは母親であるのが現状。関東のある自治体では、子どもが生まれると、お父さんに「これまでお母さんのお腹の中で生まれた命が生まれてきました。さあ、これからはお父さんの出番です。」といった趣旨の手紙と、支援の内容が記載された一覧表、「応援しています。困ったときは頼ってください。」といった内容を記したメッセージが送られてくる。最初は反発があったそうだが、回数を重ねるにつれて、自治体の窓口で父親がやってくるようになるなど、父親が育児にかかわるようになった。山形県では、ギフトや応援メッセージを送っているが、父親向けのものもやってもいいと思う。

【永盛善博委員】

- 学生に話を聞くと、父は子育てにかかわらなかったという声が多く聞かれた。育児にかかわらない男性とは結婚しないという女子学生、そんな父親にはならないという男子学生がほとんどだった。
- 育児休業が取りやすいといった子育てに理解がある職場づくりのために必要なのは、『制度より風土、風土より上司』と言われている。平成27年度の三菱UFJリサーチ&コンサルティングの調査でも、“育児休業を取りにくい雰囲気があったため、取ることができなかった”という回答が一番多いというものだった。また、九州大学の研究者が、職場に育児休業制度がある20代～40代の男性にインターネットでアンケート調査を行い、「男性の育児休暇に対し、肯定的にとるか、否定的にとるか」、「典型的な男性は育児休業に対し、どのように思っているか」を聞いたところ、育児休業を取得する男性は好ましいという評価は7割以上、他者は好ましく思っていないだろうと考える人は4割くらいだった。気兼ねして育児休業を取ることができないという面があるため、「やまがた企業イクボス同盟」において、積極的にイクボスを育てて欲しい。
- フランスの制度では、産後に男性も育児休業を取る制度があり、企業が育児休業を取得させないと、企業にペナルティが課せられるというものがある。日本には、適さないかもしれないが、繰り返しになるが、イクボスを育てていくということは大事だと思う。

【樋口愛子委員】

- 平成31年度から、子ども食堂の運営への支援を新たに始めるなど、子どもの貧困対策に力を入れていただき、感謝したい。自分は、ひとり親で子どもを育てているが、今の時代に子育てをしていれば、子育てをしやすかったのではないかと思う。
- 自分が支援している人は、サービス業でパート就労の人が多く、今年のGWの10連休は長すぎて、心が折れたといった声が聞かれる。
- 山形市では10連休に向けた対応として、つばさ保育園で休日保育を行うこととしたが、受入人数も限られていることから、預けることができるのかという点と、初めてのところに子どもを預けてまで働かなくてはいけないのかという悩みがある。
- 一方では、子育ても終わり、GW中に何もすることがないと言っている人もいる。保育園のサポーターなど、できたりできないかとも思ったりもした。
- 社会福祉士の資格を取るために養成校に入ろうとしたが、正規雇用でなく非正規雇用では、例え10年働いたとしても実務経験を満たすことは出来ないとのことで、断られ、がっかりしたことがある。シングルマザーで、二人の子どもを育てている現状では、正規雇用の壁がとても厚いということ、そのために本当に就きたい職業や取得したい資格をとることすら難しい状況にある。

【藤原由美委員】

- ・ ひとり親家庭や、祖父母が育てている家庭など、いろいろな家庭形態の子どもが増えている。あるべき家庭の姿が遠くなっている。物的支援の充実も必要だが、心理的な支援も必要。学校では「それでいい。」と、あるべき姿を求めず、このままで十分だと保護者に言っている。
- ・ ライフデザインセミナーでは、学生や社会人に対し、あるべき家庭をどのように話しているのか。あるべき家庭と違っていても、その人自身の価値は変わらないし、一生懸命子育てをして、働く上では何も劣ることはない。そういった人に素晴らしいということばをかけて欲しい。
- ・ 小学校では2020年度から新学習指導に移行する。2021年度からは中学校でも新学習指導に移行する。小学校では英語なども入り、授業日数も増える。どうやって授業日数を確保するかが課題となっている。中学校のキャリアプランの実践も見直しの対象となっているが、先生の間では必要という認識である。

【松本邦彦委員】

- ・ 天童市では“赤ちゃんの駅”という事業が始められる。子ども用のトイレがあるお店を掲載したガイドブックを作成し、子育て支援情報を提供している。
- ・ 子連れででかけることができる山形県を目指し、オムツを変えられることができる店への支援や情報提供をできるようにして欲しい。

【三浦明弓委員】

- ・ 「子育てするなら山形県」の実現に向けて、先進地の施策も参考にし、プランを作成して欲しい。
- ・ 自分と同じくらいの年代の人たちがUターンで、戻ってきている実感がある。
- ・ 幼児教育・保育の無償化になれば、女性が働く機会が増え、女性が活躍する場面も増えるので、そういった流れとなるよう環境づくりを進めて欲しい。働く女性が増えれば、経済的に余裕もでき、貧困対策にもつながると思う。
- ・ 結婚支援をしている中で、結婚を希望している人の話を聞くと、三世同居を希望しない人が多く、また、離婚も増えているので、家庭のいいところが見出せなくなっている。ライフデザインセミナーなどで、家族のモデルを子どもの頃から示すことができればいいと思う。
- ・ 働き方改革などで、労働時間の改善が求められている。地域はもちろん、会社も子育てを応援する環境づくりを進めていく必要がある。

【國方敬司会長】

- ・ 障がい者の話が出たが、障がいのある人も地域のメンバーとして、子育てを支える立場にあるという視点もあってはいいのではないかと思う。子育て中の家庭も、障がいのある人も、地域社会の一員として、子育てを応援する立場であるということを組み込むことにより、誰もがみんなで子育てをし、また、同時に育っていくということが明確になるかと思う。
- ・ 事務局には委員の皆さんからいただいた意見を反映させながら、次期プランの検討を進めていただきたい。

■その他

【事務局から、資料4-1、4-2により、「都道府県社会的養育推進計画の策定について」を説明。その後質疑応答。】

【松本邦彦委員】

- ・ 山形県家庭的養護推進計画では、グループホームの整備を進めるとされており、整備を進めるにあたっての課題はあるのか。

【事務局】

- ・ 場所の確保や職員体制が課題となっている。今年4月から開設するグループホームがあるが、グループホーム単独の運営ではなく、本体からの職員の派遣などの支援を受けての運営となっている。

【子育て推進部長】

- ・ 本日は、委員の皆様から多くの貴重なご意見をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 来年度は、現プランの最終年度にあたることから、産業支援団体等にコーディネーターを配置し、企業と就業を希望する人とのマッチングの支援を行うとともに、働きやすい企業の環境づくりに取り組むほか、イクボスや「やまがた子育て・介護応援いきいき企業」の取組も進めていく。
- ・ 次期プランの策定にあたっては、目指す社会を整理して、次回の協議会でお示ししたい。目指す社会が整理できると、施策の柱建てについての議論も進めていくことができる。
- ・ 新年度においても、委員の皆様には引き続き、次期プランの策定に対するご意見をお願いしたい。

■閉会

【事務局】

- ・ 國方会長、委員の皆様の貴重な御意見に感謝申し上げます。
- ・ 次回からは、次期「やまがた子育て応援プラン」の策定に向けて、具体的な検討をはじめることになるので、新年度においても、引き続き、皆様の協力をお願いしたい。

以上